

登場人物たち



ガーダ・アギール (23歳-35歳)

1970年、ガザ地区難民キャンプで、長女として生まれる。両親と4人兄弟、5人姉妹の11人家族だ。家族は1948年の第一次中東戦争で、イスラエルによって壊され、占領された村、ベイト・ダラス出身。ガーダは難民第三世代である。ガーダはイスラエルの占領の中で生まれ育った。パレスチナ人による第一次抵抗運動が始まったとき、彼女は高校生だった。大学は閉鎖され、進学を断念した。成績が優秀だったガーダにとって、最初の挫折だった。

ガーダの住むガザ地区南部は古い慣習の残っている地域だ。この地域ではいまだに結婚初夜の翌日、花嫁の処女の印を肉親や親戚の人たちに見せるという慣習がある。自立心の強いガーダは伝統的な結婚式を拒否し、今までのやり方にこだわる母親や友人、婚約者の母親とぶつかっていく。結局、ガーダは結婚式もあげず、新婚旅行へ出かける。1996年、ガーダは最初の子、ガイダを出産。子育てをし、大学へ通い、働く、新しい女性としての生きかたを貫いていく。しかし2000年9月、パレスチナでは第二次抵抗運動が始まる。ガーダの実家はユダヤ人植地に隣接し、連日、銃撃戦にさらされる。親戚の少年の死をきっかけに、ガーダはパレスチナ人としてのアイデンティティを揺り動かされる。幼いころ、祖母から聞いた故郷の話や歌がガーダの心に蘇った。1948年にパレスチナ人が故郷を追われた話を、祖母の年代の女性たちから聞き書きを始め、次世代のために残そうと決意する。パレスチナ社会の束縛と闘っていたガーダは、パレスチナ難民のルーツを記録することで、自分の闘いを見出した。ガーダは2児の母親となり、たくましい女性に成長していた。

ガーダの父親はエジニアで、和平後は自治政府の地方事務所に勤める。エジプトの大学を卒業し、女性も勉強を積まなければならないと考えるリベラルな考えの持ち主。叔父たちには敬虔なイスラム教徒が多いが、国連や大学に勤める叔父もいる。兄はウクライナで医学を勉強したものの、就職が決まらず何年も苦労した末、現在、ハンユニスにある病院に勤める。弟たちはそれぞれ、大学を卒業し、妹たちも大学を卒業し、結婚している。夫のナセルは同じ難民キャンプの出身。貧しい家庭の、たくさんの兄弟姉妹の中で育ち、経済的にもつらい経験を持つ。トルコで大学を卒業し、帰ってきてからはイスラエルの刑務所で2年間を過ごす。その後、ガーダと出会い、結婚。エジニアとして、水関係のプロジェクトで働き、ガーダを支えていく。



ガーダの祖母 ハデージェ (75歳)

ガーダの父方の祖母。1948年の戦争で、故郷ベイト・ダラス村（現在のイスラエル領）を追われて、ガザ地区南部のハンユニス難民キャンプで、58年間を過している。ガーダの聞き書きの中心人物。祖母は1948年以前の生活、戦争体験、故郷を追われ、難民となるまでの旅の話をガーダに話す。彼女は以前、息子たちとともに故郷を訪ねたことがある。彼女の望みは死ぬまでもう一度、故郷を訪ねることだ。しかし長い間、リウマチの病を患い、また2000年の第二次インティファダ以来、イスラエルによる封鎖で、望みがかなう可能性は少ない。48年以前から歌い継がれたパレスチナの生活を再現するような歌を歌うことで希望をつないでいる。10人の子どもがいて、全員が結婚している。



ハリーマ・シュビーア (100歳)

ガザの住民として、トルコ、イギリス、エジプト、イスラエルと4代の支配を経験してきた女性。夫を早くから亡くし、長男とともに家族を養ってきた。難民にならずに生きてきたが、2000年にパレスチナ人による抵抗運動が再燃し、彼女の家はイスラエル軍によって壊され、土地もとられ、難民となる。イエメンにいる息子の家1軒だけが残り、ハリーマは息子が帰ってくるまで家を守ると住み続ける。しかし2002年、イスラエル軍によって息子の家も壊されてしまう。ハリーマは悲しみのなかで、他界する。生前、残ったオレンジの木の下で、彼女は「ここにいるときが一番やすらぐ」と話していた。3人の息子と5人の娘がいる。



ウンム・バシム (67歳)

ウンム・バシムはガザ地区北部ベイト・ハヌーンに夫とともに暮らしている農民だ。彼女の母親はガーダの家族と同じベイト・ダラス出身。農牧業を営みながら、詩を作ったり、歌を歌ったりして暮らしている。仲のいい夫妻の生活は、1948年以前のパレスチナの生活を彷彿させ、ガーダは故郷への想いをつのらせる。しかし2002年、イスラエル軍はガザ地区に侵攻し、ウンム・バシムはベイト・ハヌーンの家と土地を奪われる。夫妻は郊外にすむ息子の家に避難するが、農牧業を続けることはもはやできなくなる。4人の息子と3人の娘がいる。